

特別編

九州の逸品

KYUSYU NO IPPIN

FILE No.49

九州の「地域ブランド」を
ご紹介致します。

長崎

ながさき

長崎べっ甲

こう

昨年、国の伝統的工芸品に指定された「長崎べっ甲」。あめ色に輝くべっ甲は、その美しさと希少性から、多くの人を魅了してきました。今回は、日本で最も古いべっ甲店として300年以上の歴史を誇る長崎市の「江崎べっ甲店」9代目・江崎淑夫氏にインタビューしました。



「江崎べっ甲店」9代目・江崎淑夫氏。
右側は昭和天皇の即位式で使われた御冠台の試作品として作った茶棚

べつ甲の歴史

べつ甲細工は、赤道付近に生息するウミガメの一種、タイマイの甲羅を巧みに加工、細工して作られ、その美しさから「海の宝石」ともいわれています。

中国では6世紀末頃にはすでに作られ、8世紀の唐の時代になると盛んに制作されていたといえます。日本には奈良時代、隋より小野妹子が持ち帰った皇室への献上品の中にべつ甲を用いた美術品があり、奈良県の正倉院宝庫に最古のべつ甲として保存されています。

江戸時代、徳川幕府の鎖国政策によってオランダ人と中国人による長崎一港での貿易となったため、べつ甲原料を容易に入手できた長崎でべつ甲細工は発達しました。長崎の花街・丸山の女性たちがこぞってべつ甲の簪^{かんざし}を髪に挿して飾り、またたく間に京都や江戸へと

流行しました。当時は、簪や櫛^{くし}、箸などのべつ甲細工が大名に愛用されていました。高嶺の花でした。

明治時代は外国人向けのみやげ品として人気を集めました。戦後は貴族から庶民のものへと変化し、特に長崎の観光ブームで需要を大幅に伸ばしました。

現在、ワシントン条約により原料であるタイマイの輸入が規制されているため、日本では材料が手に入らない状況が続いています。現存する原料の蓄えからの制作となり、後継者育成もなかなか難しいのが現状です。

長崎べつ甲

「長崎べつ甲」とは江戸時代以降、長崎市や諫早市などを中心に生産されている工芸品のことです。昨年1月に経済産業省が定める

国の伝統的工芸品に指定されました。長崎県内では「波佐見焼」「三川内焼」が1978年（昭和53年）にそれぞれ指定されて以来、39年ぶり3品目となります。日本で最も古いべつ甲店として300年以上の歴史を持つ長崎市の「江崎べつ甲店」を訪ね、9代目・江崎淑夫さんにお話を伺いました。

300年以上の
伝統を継ぐ江崎家

我が社は1709年（宝永6年）に創業し、世襲9代、300年以上の伝統を誇り、べつ甲の歴史と共に歩み続けています。

初代は江崎清蔵といい、代々清蔵、清造、栄造、いずれかの名を襲名しています。5代目・栄造は、



1937年（昭和12年）、パリ万国博にてグランプリを受賞した作品「鯉」。
6代目・江崎栄造氏作



2



3



1

1900年(明治33年)、宮内省御用達となりました。5代目が当主の時代、来日されたロシア皇帝ニコライ皇太子が店を訪れ、べつ甲を土産に購入し、親愛なる江崎よ!ニコライ!と直筆のサインを残しています。ニコライ皇太子はべつ甲細工を大変気に入られ、5代目はロシアに招待されました。そのとき、日本中から集めた特産品、美術品を持って日露貿易視察農商務省囑託としてロシアへ渡り、レニングラードで最初の日本見本市を開きました。

私の祖父である6代目・栄造は、1913年(大正2年)、新たに宮内省御用達となりました。6代目は画才のある人だったようで、江戸時代から続く江崎家伝統の技術の上に不断の研鑽を加え、数々の美術作品を作りました。1915年(大正4年)のサンフランシスコ万国博、1937年

(昭和12年)のパリ万国博ではグラプリを受賞。その功績が認められ、1957年(昭和32年)、べつ甲業界で唯一、無形文化財保持者となり黄綬褒章も受けました。翌年には、長崎特産べつ甲細工の隆盛に努め、長崎市の文化と産業の発達に貢献した業績で、市政功労者として表彰されています。

べつ甲細工の工程

べつ甲細工は、タイマイという海亀の背甲、腹甲、ツメとよばれる体の縁の部分の3カ所を用いて作られます。背甲は黄、茶、黒色の斑点模様特徴ですが、黄色部分が多いものほど上物とされ、特に腹側の黄色(あめ色)一色の甲羅から作られる製品はその希少価値のため珍重されています。

我が社では、現在8名のべつ甲職人がおり、最も長い者で50年



1.加工した甲羅を熱したことで木型に貼る「押しごて」の作業。打出の小槌や宝船など、立体的で曲線のある置き物を作る場合に使われる手法(工場長:岳野忠司氏)／2.表面を削りすべらかにする「きさぎ」と呼ばれる工程／3.サンドペーパーを使ってきれいに仕上げる／4.図案に従って彫刻する／5.独特の柔らかな光沢にするために磨きをかける／6.型どおり糸のこで切る「切りまわし」の作業／7.圧縮する前に火ばしで仮付けする

以上、この道一筋に打ち込んでいます。べつ甲細工の工程は分業で、工程ごとに熟練した職人が腕を振ります。

工程は、まず図案作りから始まり、ついで生地選びになります。べつ甲の甲羅は、色、厚みなど千差万別ですので、素材を生かし、図案に合うものをここで決めます。この時の模様を生かし具合が、出来上がりに大きく影響します。そのため、手作りに頼らざるを得ません。

次に、原料の上に直に型取りをして、のこぎりで切り抜きます。「かんぎり」や「きさぎ」という工具を用いて削り、このあと接着をします。べつ甲細工では、接着する際に、接着剤は一切使いません。べつ甲細工が「水と熱の芸術」といわれる所以です。

接着にはその品物の特徴により「焼きごて」「火ばし(ペンチを大きくしたような形状)」、「万力」

の3つの方法がとられます。いずれもべつ甲に熱を加えて接着するための方法です。この時の熱のかけ具合が非常に難しく、熱過ぎると生地を焦がしてしまい、ぬる過ぎると接着があまく、はがれてしまいます。この時の熱加減はすべて職人の勘に頼るしかありません。これは教えられただけで会得できるものではなく、自分で経験



9代目・江崎淑夫氏



2



1



4



3

1.背甲の上バラフと呼ばれる部分を用いたブローチ。天然素材ならではの美しい模様が特徴／2.あめ色で羽の透明感を出し、胴体の部分に蒔絵を施したブローチ／3.右から、繊細な透かし彫りに匠の技が光るペンダント、色合いの違ったべっ甲を組み合わせたモザイク調のペンダント／4.和装用品ながら現代的な雰囲気を持つ簪

を積み、体得するより方法はありません。

伝統を継承しつつ

今の時代にあった

べっ甲細工を提案

べっ甲細工の魅力は、天然素材が持つやわらかな風合いと世界に一つだけしかない模様の希少性にあります。我が社では、女性用としてペンダント、ブローチ、ピアス、髪止めなど、男性用としてはタイ止め、カフス、ループタイ、ベルトなど多彩なべっ甲商品を作っています。

べっ甲の素材である亀は、鶴とともに幸運を呼ぶ吉兆のシンボルとされてきました。「べっ甲」もまた、災いから身を守り幸運を招く「お守り」として昔から大切にされてきました。どうぞ、世界で一つしかないべっ甲を皆様のご家庭でも代々受け継いでいただけたらと

思います。我が社では、これからも伝統の技術を継承しつつ、職人と共に今の時代にあった新しい商品

を作り出しています。店内にはべっ甲資料館を併設しており、ガラス越しに職人の仕事

風景をご覧いただけます。長崎にお越しの際は、ぜひお立ち寄りください。

江崎べっ甲店

<http://www.ezaki-bekko-ten.co.jp/>

- 住所：長崎市魚の町7-13
- 営業時間：9:00～17:00
- 電話：095-821-0328
- 定休日：なし
- 交通：
 - JR 「長崎駅」より車で約5分
 - 長崎電気軌道 「市民会館」電停より徒歩2分
 - 車 長崎自動車道「長崎IC」より「ながさき出島道路」経由、約15分
長崎自動車道「長崎芒塚IC」より約10分



上.べっ甲の様々な商品が並ぶ店内
下.和洋折衷の建物は国の登録有形文化財に指定。明治時代の建物で、看板は日本語、英語、ロシア語の3カ国表記